

云」では、句数が減じているのなどには、そのようなことがありはしなかつたと思われる。推敲が行われるのは、この類のことではなかつたであろうか。次に宴の際は、首尾一貫して誦詠される必要はないとみられるのであり、長ければ記憶は不確かになることがあると思われる。人々の好尚に合い、度々行われたものに異伝があることになる。

五音句と七音句の場合、七音句の部分には句切れがあつて、歌意が述べられて行く際には、意味的に重いと見られるのであるが、或はリズムの上で、記憶しにくいものがあつたかと思われる。

この他、仏足跡歌・旋頭歌など歌体の関係も、あるであろうし、詳細に用語・内容をみれば、考察されることも多いと思われるが、外形上のもののみを見た。

注8 例えば春日祭の大和舞の場合、進歌（舞人が所定の位置へ進み出る時に歌われるもの）、立歌（舞人が舞をする場所から退いて来る際に歌われるもの）は、共に短歌体の歌であるが、動作が終つて了うの  
で下の句の部分は歌われない。又、神楽歌の「榊」も、伝わっているのは、途中までである。

注9 稲岡耕二「万葉集の作品と方法」（八六頁以下）など。

二句 一

(三)三期

三・四・五句 二 五句 二

(ホ)四期

三句 一 四句 一

四・五句 三 五句 二

「一云」長歌

末尾部分 ○ 中間部分 五

「或云」短歌

三期

四・五句 一 四句 一

以上、「一云」の末尾の五句を含むものは、短歌の場合五二箇所中の三一箇所であつて、それ程多いとは言得ない。但し、五句を含ませぬ二一箇所中八箇所は卷十にあり、同じく長歌は中一首は三・四二三で或本の反歌二首があり柿本朝臣人麻呂の作との異伝がある由、左注にある。

五音句と七音句では、五音句にあるものは三、末尾に五音句を持つもの五箇所であつて、七音の句の方に多い傾向のあることは、言ひ得るものであるかも知れない。

万葉集中の異伝の歌詞の中又は末尾に、小書で記されている「一云」・「或云」は、その歌の中に於る位置に、偏在する傾向がみられると言ひ得るようである。それが他に比してより確実な歌詞で伝わりそうな代表的な作者の中に、かなり著しく見られるのは、何等かの当時の歌

の性格を示していると考えられはしないであらうか。

末尾の部分に多いことは、当時の歌の作風によると言ひ得るものであるかも知れないし、或は仏足跡歌体かとも見られる可能性をもつ、編纂の際の処理によることも考えられよう。しかし反歌に多くある事実は、他の歌自体の問題とみてよいと思われる。五音句と七音句との間にあつて、七音句に存在するもの、多いことと相まって、そこに規則性があるということになるのであるから、それを必要としない推敲によるとは、少くとも全体を通じては、言ひ得ないということになる。とすれば伝誦の側からの変化とみられるのであるが、殊に長い歌詞である場合、まず末尾の部分まで記憶を保ち得ないということが考えられよう。しかし誦詠を以て職業としていた当時の人々が、末尾は不確實で許されるものではなかったのではないかと思われる。他に原因をみるならば、その誦される場合の行われ方が考えられないであらうか。人麻呂の場合は、皇子の殯宮のものと妻と生別も死別も別れる場合のもの、家持のは、詔書に対し賀する歌、憶良の場合は、七夕の歌、大伴麩凝を傷む歌、世間の住み難きことを哀しむ歌であつて、儀式の歌と、宴などの際に度々誦詠されることが考えられそうな類のものである。とすれば、前者は或る動作と共に行われるのであるから、儀式の際その部分が完了すれば、背景として誦される必要はなくなる。<sup>注8</sup>即ち末尾の部分は行なわれないのである。その誦されない部分の記憶が、早く忘れられることになり、不確かにならないであらうか。ただ殯宮の場合、その際数度にわたって繰り返されると考えられているのであるが、<sup>注9</sup>その場合、途中で直される—内容の適しない場合、歌の長さの適しない時など—ことが行われ、二・一九九の五七句以下の「一

にそれぞれ異伝がある。更に、二・一九九には或書反歌が、二・二一〇の反歌（短歌）二一一と二一二には、或本歌二二三の反歌（短歌）三首の中の二首に各々異伝とみられるものがある。二・一三一の反歌一三二に、或本反歌一三四のあることが注意される。以上、長歌に対する反歌を一つのまとまったものとし、それによつて処理しえないものに、「二云」・「或云」以外の異伝があるらしいことは、いずれにせよ末尾の部分が歌詞として動揺しやすい性格があつたと、みてよいのではないかと思われる。但し一・三八のみが例外となる。

五音の句と七音の句については、異伝箇所計四九の中、五音句にあるものは、長歌に五、二・三句とつゞき末尾に五音句をもつ短歌一。長歌の三例は二・一九六のものである。やはり七音句に存在する傾向は、否み得ないと思われる。

注7 順序は年代順、数句にわたる場合、同一とみられる句を含むことがあるが、訓の問題があるものがあるので、一つづきのものとした。

又、人麻呂歌集は除く。

#### 四

家持・憶良・人麻呂以外の作については、次のようである。「作者類別時代順」  
万葉集」の分類により示す。

「一云」 短歌

(イ) 一期

一・二・五句 一

(ロ) 二期

|            |    |        |        |
|------------|----|--------|--------|
| 一・二・三句     | 一  | 二句     | 一      |
| 二・三句       | 一  | 三・四・五句 | 一      |
| 四句         | 一  | 四・五句   | 二      |
| 五句         | 三  |        |        |
| 旋頭歌        | 五句 | 一      | 一・二句 一 |
| (イ) 作者年代不明 |    |        |        |
| 卷十四        |    |        |        |
| 三句         | 一  | 五句     | 一      |
| 卷十一        |    |        |        |
| 一・二句       | 一  | 二・三句   | 一      |
| 二・五句       | 一  | 四・五句   | 一      |
| 五句         | 一  |        |        |
| 卷十二        |    |        |        |
| 三・四・五句     | 一  | 四・五句   | 一      |
| 五句         | 二  |        |        |
| 卷七         |    |        |        |
| 一・二句       | 二  | 一・二・三句 | 一      |
| 三・四・五句     | 一  |        |        |
| 卷十         |    |        |        |
| 一・二句       | 二  | 一・二・三句 | 一      |
| 二句         | 三  | 三句     | 一      |
| 三・四句       | 一  | 三・四・五句 | 一      |
| 四・五句       | 三  | 五句     | 二      |
| 卷十六        |    |        |        |

明日香川しがらみ渡し塞かませばながる、水母能杼尔賀有萬思

一云水乃与杼尔加有益(二・一九七)四・五句 短(反)

明日香川明日谷一云左倍見よと念八方一云念香毛我が大君の御名忘世奴一云御名不所忘

(二・一九八)二句・三句・五句 短(反)

●梓弓 声尔聞而一云声耳聞而(三〇句)……(二・二〇七)長全五三句

秋山の黄葉をしげみ惑ひぬる妹を求めむ山道不知母一云路不知而(二・二〇八)五句 短(反)

●打蟬等 念之時尔一云宇都曾臣等念之(一・二二句)……(二・二二〇)長全五七句

●人こそ見らめ 滴無等一云磯無登(五句)……よし多やし 滴者一云磯者

無鞆(一〇句)……か寄りかく寄る 玉藻成 依宿之妹乎一云波之伎手本余思妹之乎

(二・三・二四句)……(二・一三一)長全三九句

●妻ごもる 屋上乃一云室上山山乃(二八句)……(二・一三五)長全四九句

青駒が足がきを速み雲居にそ妹が当乎過而来計類一云当者隠来計留

(二・一三六)四・五句 反

秋山に落つる黄葉しましくは勿散乱曾妹があたり見む一云知里勿乱

曾(二・一三七)四句 反

●稻日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき加古の島所見一云湖見

(三・二五三)五句

●楽浪の志我能一云比良乃大和太淀むとも昔の人に亦母相目八毛一云将会跡母戸八

(二・三二)二句・五句・反(但し、二九の反歌二首の中)

楽浪の志我津子等何一云志我乃津之子我罷り道の川瀬の道を見ればさふしも

(二・二二八)二句 短(反)

「或云」

……榎原の 日知之御世或云自宮(四句)……天の下 所知食之乎或云食来

(二〇句)……知らしめししを 天尔満 倭乎置而 青丹吉 平山

乎超或云虚見倭乎置青丹吉平山越而(二・一二・一三・一四句)……いかさまに 御念

食可或云所念計米可(一六句)……ここと言へども 春草之 茂生有 霞立

春日之霧流或云霞立春日香霧流夏草香繁成奴留(三二・三三・三四句)……大宮所

見者悲毛或云見者左夫思母(三七句)(二・二九)長全三七句

以上、次のようにまとめられる。

「一云」 短歌 二句 一(反歌)

四句 二(反歌二)

二・三・五句 一(反歌一)

二・五句 一(反歌一)

四・五句 二(反歌二)

五句 二(中反歌一)

長歌 初頭部分 一

中間部分 二九

末尾部分 一

「或云」 長歌 中間部分 五

末尾部分 一

これによれば、短歌・長歌共に、殊に長歌にあつて末尾部分に少い

点、憶良・家持の場合とは異なる。しかし、短歌の大部分が反歌又は

その位置にある短歌として存在するものであつて、末尾に異伝のない

長歌には、その反歌に異伝がある。即ち、二・一九四には反歌一九五

の四句に異伝があり、二・一九六には一九七・一九八があつて各々四

五句、二・三・五句に「一云」を持つ。又、二・二〇七には二〇八の

五句に、二・一三五には一三六及び一三七があつて、四・五句と四句

首中の第一首にあるのであるが、その異伝は長歌の最後の部分と殆ど異ならず、その繰り返しのようなものである点、他の場合とは異なるのであるかも知れない。卷十九・四一六一、四一六二は、共に四一六〇に対する反歌である。

次に五音の句と七音の句について、短歌の場合五音の句のみものは二例のみ、他は七音又は末尾に七音句のあるもの、長歌の場合も、卷五・八〇四を除き、一例のみが五音句である。全体の数が多しといえないのであるから、偶然とも見得るかも知れないが、一応注意すべきものがあるかと思われる。

注3 歌中のどの部分の異伝か疑問のある場合は、原則として「万葉集総索引」のものによる。又、示し方は異伝とそれに対する歌詞の部分  
を万葉仮名で記す。

注4 歌中のどの部分の異伝か定説がない。

注5 「新考」及び「注釈」の説による。

注6 卷五・八〇四、第十九句以下のもの。

三

次に柿本人麻呂の作についてみる。異伝の数も多く、憶長、家持の場合とは、その背景をなす時代的な事情も異なるが、同時に歌中に存在する位置のみを扱う。反歌にある場合は、その反歌に対する長歌があればその次に、又、反歌の記載がないもの、題詞に短歌とあるもの、一般に反歌とされている場合は全部含める。<sup>注7</sup>

「一云」

- ……秋立てば 黄葉頭刺理一云黄葉 加射之(一八句)……(一・三八)長全一九句
- ……はかりし時に 天照 日女之命一云指上 日女之命(一一・一二句)……神の命と 天雲之 八重搔別而一云天雲之 八重雲別而(二二・二三句)……石門を開き 神上 座奴一云神登座 尔之可波(三五・三六句)……たはしけよと 天下一云 食国(四五句)……まねくなりぬれ 其故 皇子之宮人 行方不知毛一云刺竹之皇子宮 掃迎不知尔為(六三・六四・六五句)(二・一六七)長全六五句
- ……ぬばたまの 夜床母荒良無一云阿 礼奈牟(一六句)……けだしくも相屋 常念而一云公毛 相哉登(二〇句)……(二・一九四)長全二九句
- ……きたへの袖かへし君玉垂の越野過去またも逢はめやも 一云乎知 野尔過奴(二・一九五)四句 反
- ……かけまくも 忌之伎鴨一云由遊志 計礼籽母(二句)……天の下 治賜一云掃 賜而(二四句)……まつろはぬ 国乎治跡一云掃 部等(三四句)……吹き鳴せる 小角乃音母一云笛 乃音波(四八句)……諸人の 協流麻侶尔一云聞 或麻泥(五二句)……春さり来れば 野毎 著而有火之一云冬木成 春野燒火乃(五七・五八句)……み雪降る 冬乃林尔一云由 布乃林(六四句)……い巻き渡ると 念麻侶 聞之恐久一云諸入見 或麻侶尔(六七・六八句)……矢のしげけく 大雪乃 乱而来礼一云霰成曾知 余里久礼婆(七一・七二句)……立ち向かひしも 露霜之 消者消倍久去鳥乃 相競端尔一云朝霜之消者消言尔 打蟬等安良蘇布波之尔(七・七六・七七・七八句)……万代に然之毛将有登一云如是毛 安良無等(九六句)栄ゆる時に 吾大王 皇子之御門乎一云刺竹皇 子御門乎(九九・一〇〇句)……(二・一九九)長全一四九句
- ……上つ瀬に 石橋渡一云 石浪(四句)……打橋渡す 石橋一云 石浪(七句)……自言も絶えぬ 然有鴨一云所已 乎之毛(四九句)……ぬえ鳥の 片恋孀一云 為乍(五二句)……片恋づま 朝鳥一云 朝霧(五三句)……(二・一九六)長全七五句

知周疑南 一云和何余須疑奈牟(五・八八六)長全三一句中三一句

常知らぬ道の長手をくれくれといかにか行かむ可利忌波奈斯尔

一云可例比波奈之尔(五・八八八)五句反

家にありて母が取り見ば慰むる心はあらまし斯奈婆斯農等母一云

能知波志奴等母(五・八八九)五句反

出でて行きし日を数へつつ今日今日と我を待たすらむ知波良

波母 一云波我迦奈斯佐(五・八九〇)五句反

一世にはふた、び見えぬ父母を置きてや長く阿我和加札南 一云相

別南(五・八九一)五句反

足日女神の命の奈都良須等み立たしせりし石を誰見き 一云阿由都

流等(五・八八九)三句

天の川相向たちて我が恋ひし君来ますなり紐解き設けな 一云向河

(八・一五二)二句

……さ舟塗りの 小舟もがも 玉巻きの 真可伊毛我母一云小棹  
毛我毛

……(八・一五二〇)長全三五句中二二句

……朝なぎに いかき渡り 夕塩尔一云夕倍尔毛 い漕ぎ渡り……(八・一

五二〇)長三五句中二五句

……ま玉手の 玉手さし交へ あまた夜も 寐而師可聞一云伊毛左  
祢而師加

秋にあらずとも(八・一五二〇)長三五句中三四句

……あまた夜も 寝ねてしかも 秋尔安良受登毛一云秋不待登毛(八・一五

二〇)長三五句中三五句

風雲は二つの岸に通へども吾遠孀之一云波言そ通はぬ(八・一五二一)

四句反

以上 山上 憶良

右によれば、歌中に於る存在の位置に、傾向があるように思われる。即ち、

家持 短歌 一・二句

三句

三・四・五句 一(反歌一)

四・五句 二(中反歌一)

五句 五(中反歌三)

長歌 末尾部分 一 但し二句を別に記す。

憶良 短歌 二句

三句

四句 一(反歌一)

五句 四(反歌四)

長歌 中間部分 五

末尾部分 二 但し二句を別に記す。

その他 二注6

とまとめられ、短歌についても長歌についても末尾の部分にあるものが多いといえるようである。短歌にあつては十七例中十二例が末尾に關係するのであり、憶良の長歌にあつては三首の中、二首にはその末尾に「一云」の異伝がある。又短歌の中で長歌の反歌であるものについては、第四句にある一例を除き、全部が末尾の部分にある。尚、同一の長歌に対し、反歌が二首以上ある場合は、卷十八・四一〇一に對し四一〇二以下四首の反歌があり、異伝のあるものは最後の四一〇五、卷五・八八六に對する八八七以下五首の反歌の中、あとの四首の末尾に「一云」がある。ただ卷十八・四〇九四の反歌四〇九五が、三

●石川郎女は「大津皇子宮侍」とあるもの。

●坂上人長・元正天皇・山前王・河辺宮人には作者に

ついて異説がある。

以上、数及び作者については、集全体に於て限られた一部であつて柿本人麻呂と山上憶良・大伴家持の作が、他に比較して多い。更に人麻呂の場合は、それが限られた数の歌の中に、存在する向がある点、憶良・家持とは趣を異にするかと思われる。

各巻の性格の中に於る異伝、又、その個々についての考察は、多くなされているのであるが、これ等全体を通じて考えられることは、他にないであろうか。「一云」が全巻に存在するのであるが、どの程度の如何なる同一性を示すものが、あるのであろうか。

注2 作者・順序・その他「作者類別万葉集」による。

## 二

家持及び憶良の作についての異伝「一云」をあげる。<sup>注3</sup>

黒木取り草も刈りつつ仕目利いそしきわけと誉めむともあらず

一云仕登毛(四・七八〇)三句

玉ほこの道に出で立ち別れなば見奴日佐麻祢美孤悲思家武可母

一云不見日久弥恋之家牟加母(十七・三九九五)四・五句

みなと風寒く吹くらし奈呉の江に妻よび交し多豆左波尔奈久一云

多豆佐和久奈里(十七・四〇一八)五句

平敷の崎こぎたもとほりひねもすに見とも飽くべき浦にあらなく

注4 一云伎美我等波須母(十八・四〇三七)

……いや立て 思ひし増る 大君の 命の幸乃<sup>一云</sup> 聞者貴美

一云貴久之安礼婆(十八・四〇九四)長全一〇七句中一〇六句・一〇七句

ますらをの心思ほゆ大君の命の幸乎<sup>一云</sup> 聞者多布刀美 一云貴久之

安礼婆(十八・四〇九五)四句・五句反

白玉の五百つ集ひを手に結びおこせむ海人は牟賀思久母安流香

一云我家牟伎波母(十八・四一〇五)五句反

春設而如此帰等母秋風にもみたむ山を越え来ざらめや 一云春去者

帰此鴈(十九・四一四五)一・二句

言問はぬ木すら春咲き秋付けば黄葉散らくは常乎奈美許曾 一云常

无牟等曾(十九・四一六一)五句反

うつせみの常なき見れば世の中に心付けずて念日曾於保伎 一云曠

日曾於保吉(十九・四一六二)五句反

ほととぎす鳴く羽触れにも散尔家利盛過良志藤奈美能花 一云落奴

倍美袖尔古伎納都藤浪乃花也(十九・四一九三)三・四・五句反

群鳥の朝立ち去にし君が上はさやかに聞きつ於毛比之其等久一云

於毛比之母乃乎(二十・四四七四)五句

以上 大伴 家持

……何時の間か 霜の降りけむ 久礼奈為能<sup>一云</sup> 面の上の

……(五・八〇四)長全五七句中二三句

……留みかね過しやりつれ 美奈乃和多 迦具漏伎可美尔 伊都

乃麻可 斯毛乃布利家武 久礼奈為能<sup>一云</sup> 意母提乃宇倍尔

伊豆久由可 斯和何伎多利斯<sup>一云</sup> 散久伴奈能<sup>注5</sup>

ますらをの をとこさびすと(五・八〇四)長全五七句の十九句以下

……世の中は かくのみならし 犬じもの 道に伏してや 伊能

割注及び文字を小さくして記されており、他の左注・題詞にある類のものとは異なる。更に「一書」・「一本」・「或書」・「或本」など、本書の語が使用されているのからして、記載され歌詞として定着したものであったことが考えられるのであるから、口誦を記したものととも思わせる。「云」とあるものとは、一応分けてみる必要があるであろう。よって全巻にわたって存在し、その内容を広く解される可能性のある、「一云」の異伝と、数も比較的少なく、使用範囲も限られているが、形式上類似する「或云」によるものとをみてみる。

「一云」・「或云」という歌詞の異伝を持つ作者と、その存在する箇所数は次のようになる。但し一箇所<sup>注2</sup>に二句以上にわたる場合も一箇所として数える。又、その作者の集中に於る全歌数と、長歌・短歌の別も示す。

| 作者      | 「一云」 |   |     | 全歌数 |   |     |
|---------|------|---|-----|-----|---|-----|
|         | 長    | 短 | その他 | 長   | 短 | その他 |
| 天智天皇    | 二    | 一 |     | 一   | 三 |     |
| 古歌集     | 一    | 一 |     | 二   | 一 |     |
| 石川郎女    | 一    |   |     | 二   |   |     |
| 柿本人麻呂   | 四    | 三 | 九   | 二〇  | 七 | 五   |
| 柿本人麻呂歌集 | 五    | 四 | 一   | 二   | 三 | 三   |
| 川島皇子    | 一    | 一 |     | 一   |   |     |
| 但馬皇女    | 一    | 一 |     | 四   |   |     |
| 長意吉麻呂   | 一    | 一 |     | 一   | 四 |     |
| 坂上人長    | 一    | 一 |     | 一   | 一 |     |
| 丹比笠麻呂   | 一    | 一 |     | 一   | 二 |     |

| 作者 | 依羅娘子 | 作者年代不明 | 卷十三 | 卷十四 | 卷十一 | 卷十二 | 卷七  | 卷十  | 卷十六 | 山上憶良 | 大伴旅人 | 山前王 | 博通法師 | 作者不審 | 大伴家持 | 作者未詳 | 中臣宅守 | 田辺福麻呂歌集 | 「或云」 | 柿本人麻呂 | 柿本人麻呂歌集 | 河辺宮人 | 元正天皇 |
|----|------|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|-----|------|------|------|------|------|---------|------|-------|---------|------|------|
|    | 一    |        | 一   | 二   | 九   | 九   | 四   | 一四  | 一   | 一四   | 二    | 四   | 一    | 一    | 一四   | 三    | 三    | 二       | 二    | 六     | 一       | 一    | 一    |
|    |      |        | 一   | 二   | 七   | 九   | 四   | 一四  | 一   | 三    | 二    | 一   | 九    | 一    | 一    | 三    | 三    | 二       | 二    | 二     | 一       | 一    | 一    |
|    | 三    |        | 二四〇 | 二   | 七二  | 三八〇 | 三二四 | 五三二 | 八   | 一    | 一    | 二   | 三    | 九    | 四六   | 五    | 四〇   | 一〇      | 二〇   | 二〇    | 二       | 二    | 一    |
|    |      |        | 四七四 | 一七  | 二六  | 二四  | 四   | 九二  | 四   | 六四   | 七五   | 二   | 三    | 九    | 四三   | 一三六  | 四〇   | 二一      | 七五   | 三五    | 三五      | 六    | 七    |

●全歌数の「その他」は旋頭歌・仏足跡歌など。



# 万葉集の歌詞の異伝

—「一云」・「或云」—

中村直子

万葉集には歌詞の異伝の記載がある。そしてそれは、それが最も多く見られる柿本人麻呂の作について、後代の伝誦による変化を記したものであるのか、作者自身の推敲による変改かが、主として問題とされている。しかるに集中最も後期に属し、代表歌人の一人で、その編纂に関係が深いと見られている、大伴家持の作についても、歌詞の異伝がある。その表記の形式は、単一の編纂とは見られぬ、その性格からして、一様ではない。巻別に見ると次のようである。<sup>注1</sup>

| 巻 | 一云 | 或云 | 或本 | 或書 | 一書 | 一本 |
|---|----|----|----|----|----|----|
| 一 | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  |    |
| 二 | ○  |    | ○  | ○  | ○  |    |
| 三 | ○  | ○  | ○  |    | ○  |    |
| 四 | ○  |    |    |    |    |    |
| 五 | ○  |    |    |    |    |    |
| 六 | ○  |    | ○  | ○  |    |    |
| 七 | ○  |    | ○  |    | ○  |    |
| 八 | ○  |    |    |    | ○  |    |
| 九 | ○  | ○  |    |    |    |    |

|    |   |   |   |  |   |  |
|----|---|---|---|--|---|--|
| 一〇 | ○ |   |   |  |   |  |
| 一一 | ○ | ○ |   |  |   |  |
| 一二 | ○ | ○ | ○ |  |   |  |
| 一三 | ○ |   | ○ |  |   |  |
| 一四 | ○ |   |   |  | ○ |  |
| 一五 | ○ |   |   |  |   |  |
| 一六 | ○ |   |   |  | ○ |  |
| 一七 | ○ |   |   |  |   |  |
| 一八 | ○ |   |   |  |   |  |
| 一九 | ○ |   |   |  |   |  |
| 二〇 | ○ |   |   |  |   |  |

かなり多くの巻に、異なる種類が存在するのは、少くとも成立の時点に於て、何等かの意味で異種のものとして意識されていたと、考えることが可能であると思われる。存在する数の上では多いとしても、それ等の作の背後・周囲等についての事情を知る、確実な資料の得難い古い時代のものよりも、それ等の推測が多少はなされやすいと思われる、後期の作についてのものから、その性格をみる手掛りが、得られはしないであろうか。

注1 歌詞以外の左注にあるものも含む。「一頭云」など数の限られているものは除く。

前記の六種の形式のうち、「一云」・「或云」は、歌詞の中又は末尾に、

一